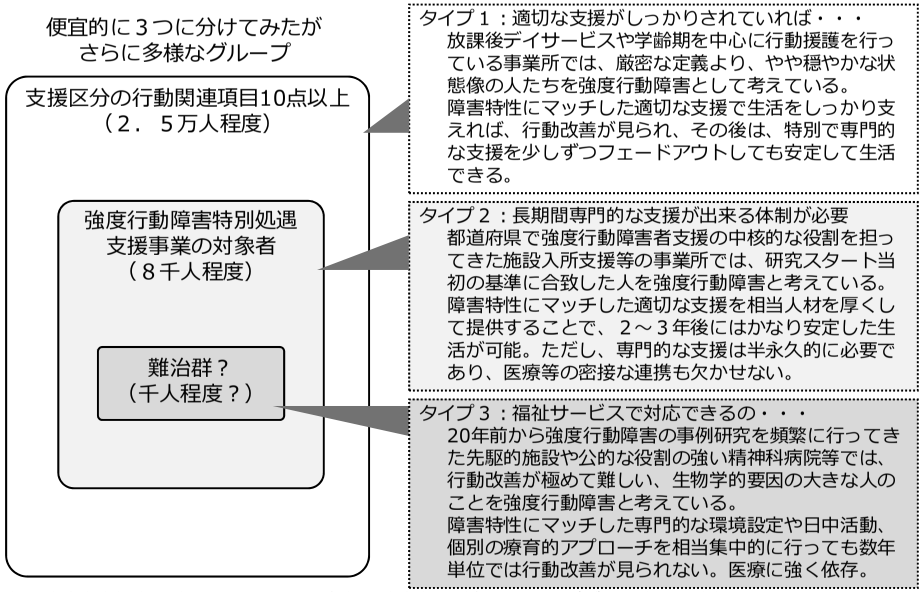
強度行動障害と近隣領域

相談支援を中心に障害保健福祉の対象者が拡大している　（多様なニーズ）

近隣領域を除いても専門機関で多様なイメージ



強度行動障害支援者養成研修ではすべて強度行動障害の対象とするのだが、現実的な支援のノウハウは異なる？

強度行動障害支援のノウハウを蓄積するには

タイプ１　≒　2.5万人

- ○　人口 5万人の都市（圏域）では、強度行動障害は 10人
- ○　人口10万人の都市（圏域）では、強度行動障害は 20人
- ○　人口30万人の都市（圏域）では、強度行動障害は 60人
- ○　人口60万人の都市（圏域）では、強度行動障害は120人

タイプ２　≒　8千人

- ○　人口 5万人の都市（圏域）では、強度行動障害は　3人
- ○　人口10万人の都市（圏域）では、強度行動障害は　6人
- ○　人口30万人の都市（圏域）では、強度行動障害は 18人
- ○　人口60万人の都市（圏域）では、強度行動障害は 36人

タイプ３　≒　千人

- ○　人口 5万人の都市（圏域）では、強度行動障害は　0人
- ○　人口10万人の都市（圏域）では、強度行動障害は　0人～1人
- ○　人口30万人の都市（圏域）では、強度行動障害は　2人～3人
- ○　人口60万人の都市（圏域）では、強度行動障害は　5人

どんなタイプであっても、強度行動障害は市町村・圏域単位でたくさんいるわけではない。
１つの事業所、１つの市町村で支援体制の構築やノウハウの蓄積を行うことはまったく現実的ではない。少なくとも人口規模30万人～60万人の広域で体制構築を検討する必要がある。

２．研修のターゲットとする強度行動障害の分析（まとめ）

強度行動障害とは（定義）

- ○　1980年代後半に誕生した用語
- ○　重度の知的障害と自閉症を併せ持つ人を当初より想定
- ○　多くは思春期以降から成人期前半に比較的重篤な状態になる

行動障害の近隣領域とグラデーション

- ○　障害保健福祉の対象者拡大により行動障害の解釈が広がっていたが
- ○　強度行動障害と急性期精神科症状や反社会的行動群とは対応が異なる
- ○　強度行動障害といっても関わる専門機関によりイメージが異なる

ある程度広域で支援体制やノウハウ構築が必要

- ○　厳密な定義より穏やかな状態像まで含めても強度行動障害者は少ない
- ○　１事業所や小規模な市町村が単独で支援体制を構築することは非現実的
- ○　都道府県や人口30万人～60万人規模の圏域で体制整備が必要になる

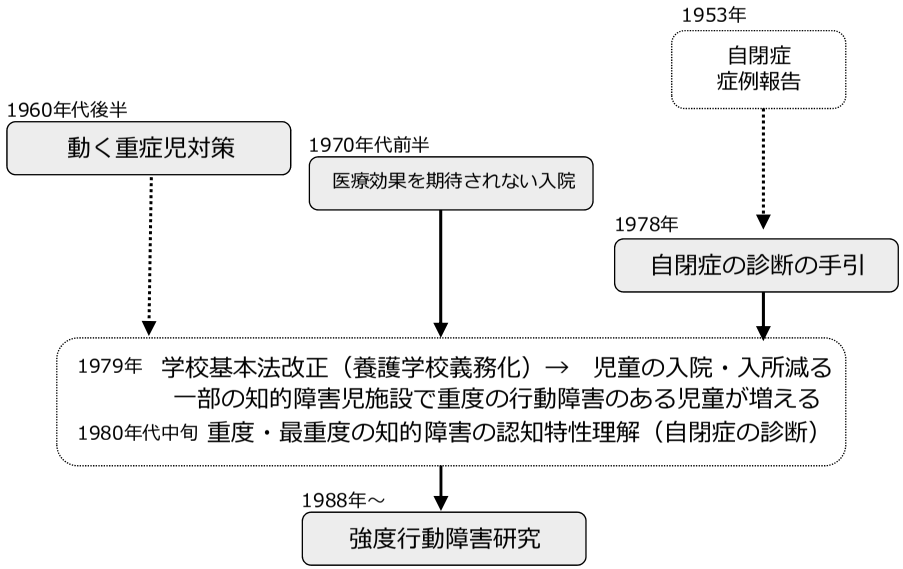
3．強度行動障害研究の経過を整理

強度行動障害のある人を支える施設・障害福祉サービスは格段に増えているが・・・

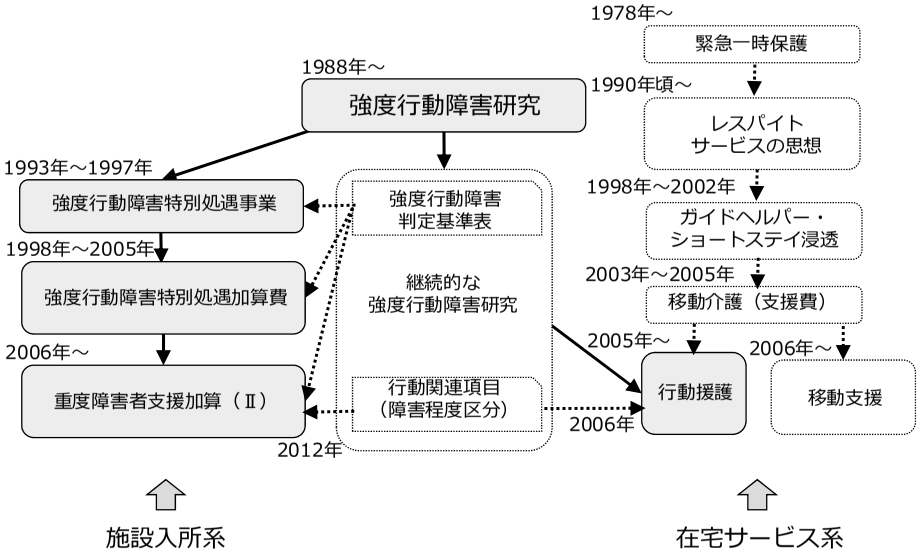
27才になる自閉症の息子も幼児期、学齢期から飛び出しや破壊行為が続き、専門施設の入所を経験し、視覚的なサポートを使いながら暮らしておりましたが、23才頃から破壊や自傷が急に増え、24才の秋には家での生活が破綻し緊急入院となりました。その後、家に戻っても同じことの繰り返しになることは目に見えていましたし、二度と家には戻りたくないという本人の強い要求がありましたので、彼の生活の場を探し始めました。県内外の入所施設にあたってみましたが、受け入れ先がないのです。行政の担当者も努力してくださいましたがなかなか見つかりません。病院からは医療としてできることはもうないので一日も早く退院をと迫られ、家に帰されたら二人で死ぬしか無いのではというギリギリの状態でした。一番入所施設の助けを必要とする時に門を閉じられるのだという現実を突きつけられ愕然としました。

※かがやき2014年10号（自閉症協会指導誌）　木村ひとみさんの原稿より抜粋

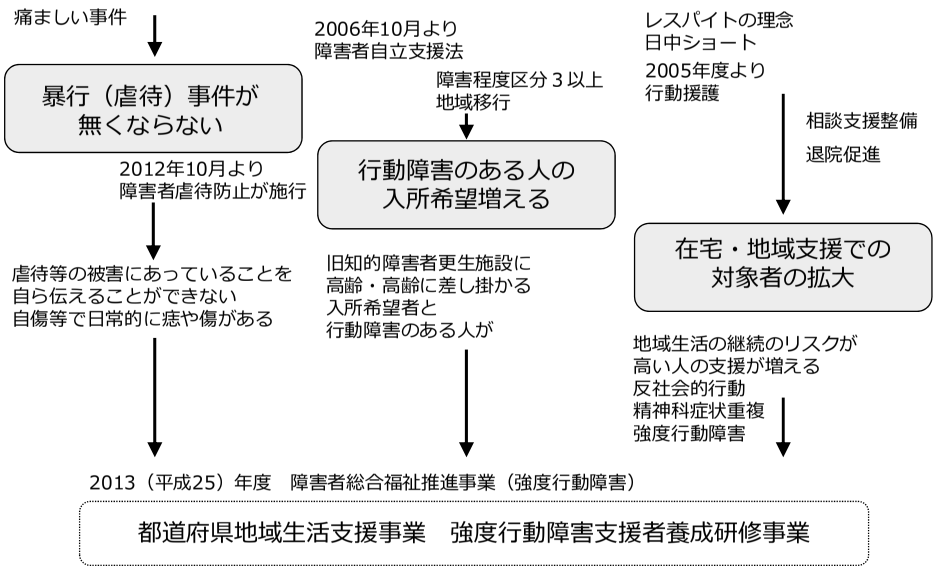
強度行動障害研究の経過を整理①



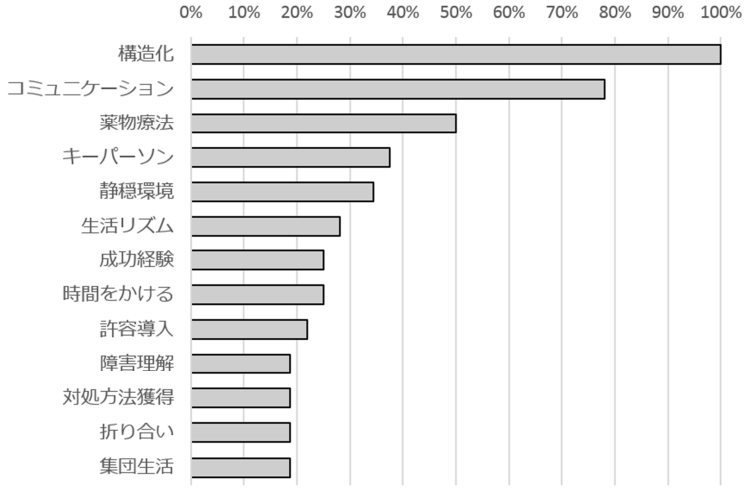
強度行動障害研究の経過を整理②



強度行動障害研究の経過を整理③



強度行動障害支援技法のコンセンサス①



強度行動障害児者の正確な支援経過の情報が得られた32事例それぞれに、「有効であった支援方法」を確認し、集計したグラフ。
飯田雅子『強度行動障害を中核とする支援困難な人たちへの支援について』さぽーと　2004年11月号（45-51page）

強度行動障害支援技法のコンセンサス②

- ☑ 構造化された環境の中で
- ☑ 医療と連携（薬物療法を活用）しながら
- ☑ リラックスできる強い刺激を避けた環境で
- ☑ 一貫した対応をできるチームを作り
- ☑ 自尊心を持ちひとりでできる活動を増やし
- ☑ 地域で継続的に生活できる体制づくりを

10年前の飯田班の強度行動障害児者にとっての有効な支援方法をシンプルにまとめたもの。
強度行動障害支援者養成研修（基礎研修）受講者要テキストより（2014）

強度行動障害支援技法のコンセンサス③

②居住内の物理的構造化
自室や自分用のスペース確保
防音等の近隣への対応完備

③ひとりで過ごせる活動
見守りなしで一定時間過ごせる活動
終わりのルールがあること

④確固としたスケジュール
繰り返しの日課を同居家族が許容
スケジュールの伝達・変更システムあり

⑤移動手段の確保
日々の送迎体制確立

①安定して通える日中活動
概ね１日最低４時間以上
週に５日程度はコンスタントに
夏休み等の長期休暇は代替を

決まりきった日課
個別のスペースの確保
健康や安全に配慮が行き届く場

現在の生活を支える５つのツール

長期的な生活を支える補助ツール

《レスパイト・サービス》
ショートステイや行動援護、日中一時等の計画的な活用。あるいは緊急一時サービスの確保

《専門的なアドバイス》
医師・保育士・教師・心理・言語・ＳＷ等の専門家、あるいは地域の親の会等からのアドバイス

《その他の支え》
経済的な負担軽減、住宅事情、傷病に対する緊急の医療、家庭内・親族・地域の受入れ、ボランタリー組織等、安心して生活が継続できる支え

快適な地域生活へ向けての福祉サービス利用に関する研究のまとめから。のぞみの園（2013）

大切なキーワード　『構造化』

構造化とは（背景）

- ここで言う「構造化」とは自閉症の支援として40年以上歴史のあるもの
- 生まれは、英米（論文は米が早く、有名になったのは英から）
- ひとつの技法ではなく、自閉症支援の大切なパッケージと考えるとわかりやすい
- ここ30年程前から、世界的に自閉症の支援の基本は「構造化」という時代に
- もっとも有名なのは、米国ノースカロライナ州のTEACCHプログラム
- 日本でも比較的早い段階から取り組まれていたが、認知されてから20年

TEACCHプログラムの特徴

- 個別化：１人ひとりの包括的なアセスメントが前提
- 学習スタイル：アセスメントは１人ひとりの学習スタイルを尊重すること
  → 学習スタイルの勉強は大切！　でも、この時間では伝えられない！
- 強み：情報処理の弱点を補い、１人ひとりの強みを活かす環境作り（構造化）
- 積極的：構造化された環境で、多様な参加機会やスキルの学習等を計画的に。
- 自尊心：自らできる小さな活動から社会生活へ。自尊心を持ち生きていく。
- 現実的：包括的プログラム（研究と実践）→人員配置等現場で応用可能
- 経験則：教育や福祉の現場から生まれたノウハウを理論的に統合していく

構造化とは（やさしい定義）

自閉症の人の１人ひとりの学習スタイルに合わせて、「今、何をするのか」「次に、どうなるのか」を予測可能に、周囲の環境を調整し、分かりやすく伝える方法

３．強度行動障害の経過を整理（まとめ）

長い間、支援の手がかりが見つけられなかった存在

- ○　1960年代後半から強度行動障害に類似の状態像の困難さが指摘される
- ○　医学的には、重度・最重度知的障害で自閉症が大多数のグループ
- ○　特定の支援困難な対象として認識されたのは1980年代後半

強度行動障害研究と制度改正の流れ

- ○　25年前より強度行動障害研究。10年前から支援の枠組みがほぼ固まる
- ○　強度行動障害を対象とした特別な制度は様々な経過から現在も続く
- ○　全国に専門的な支援が広まらない。支援方法以外の要因を明らかに
- ○　虐待として痛ましい事件が何度も繰り返される（早急な対応）

強度行動障害者支援の基本的な枠組み（基礎研修用）

- ○　強度行動障害支援者養成研修の内容は過去の重要な研究成果の整理から
- ○　６つの基本的な枠組み
- ○　地域生活を支える5つのツールと長期的な支えとなる補助ツール
- ○　障害特性に配慮した支援としての「構造化」

1日目
13:30

【演習】

障害特性の理解とプランニングⅠ

ー日中活動場面における支援の手順書を作成するー

中村 公昭
（社福）横浜やまびこの里 東やまたレジデンス

この時間の目的

行動障害が頻発する要因の一つに、対象者の状態にそぐわない活動（生活環境）ということが考えられます。この時間は、生活介護事業所で強度行動障害のある人に日中の活動を提供する場面を想定し、自閉症や知的障害の障害特性に配慮した**「支援の手順書」を作るプロセスを学びます**。

【ポイント】
① 実際の起きたことや本人の行動を客観的に捉えましょう。
② 自閉症や知的障害の障害特性と環境との相互作用に着目して、「なぜそのような行動が起きているのか」という行動の理由や背景を考えてみましょう。
③ 本人の強みや好みを活用して具体的な支援の方法を検討しましょう。

この時間の流れ

13:30	14:00	14:50	15:10	15:25

〔全体〕演習の説明 事例の紹介 30分 → 〔全体〕モデル演習 50分 → 〔グループ〕演習① 20分 → 〔全体〕発表 15分 → 〔全体〕まとめ 5分

事例の紹介｜高崎のぞむ さん

「情報シート」（別刷）の内容を確認します。

- 高崎のぞむさんの生育歴
- サービス等利用計画【要約】
- サービス等利用計画【週間計画表】
- 個別支援計画
- 生活介護事業所「あじさい」
- 支援の留意点

- 追加情報
- 行動援護を利用したのぞむさんの外出

必要な、手順の見直し

- のぞむさんが通っている生活介護事業所「あじさい」では、今年の春から６人ユニットでの活動を始めました。「のぞむさん」や他の行動障害がある利用者にとって『安心感』と『自立的な活動』を提供することを目標に、ユニット化や支援内容の見直しを開始しました。
- まずは各種記録内容を整理することから始めました。「のぞむさん、人が見えるとそっちが気になって作業や休憩ができなくなるんだ」「あっ、タイマーの意味は分かっているんだ」･･･整理した内容を「支援の留意点」としてまとめました。そんなとき、ふと、のぞむさんのある行動を思い出しました。
- 思い出していたのは「来所」場面です。来所し、静養室で更衣とスケジュール確認を行った後、作業室へ行って椅子に座って待つ（10:00開始までの約20分間）という流れなのですが、のぞむさんは作業室で一旦椅子に座ると、しばらくして廊下をウロウロと歩き回っています。そんなとき「椅子に座って待ちましょうか」と声をかけますが、全く聞いていない様子です。日によっては、徐々に表情が強ばり、跳びはねたり、別の利用者に向かっていくんじゃないかと思う場面もありました。
- いつもは、作業担当の職員が10時前に来ると、すぐに作業室の椅子に戻ります。でもその人が急に来れない日は、10時を過ぎても、他の人が作業をしていても廊下を歩いていました（10:45のお茶休憩から参加）。

手順書の作成プロセス

観察・予測｜日々の生活状況やアセスメントシート等から情報を収集

生じている問題・生じうるリスクを具体的に記す

① 背景の障害特性を推測｜氷山モデル

行動の背景にある障害特性（生物学的・心理的）と環境要因を推測し、リストアップする。

② 障害特性を「強み」の表現に変換

リストアップした障害特性を「強み」の表現に変換する 。

③ 他の場面から「強み」のリスト追加

他の場面の観察から、リストされていない「強み」を加える。

④ 「強み」を活かした新たな環境

生じている問題・生じうるリスクのある場面で、「強み」のリストを活かした環境づくり（構造化）の計画を立てる。

モデル演習｜来所場面

右の支援手順書は、のぞむさんの 「これまで」の支援手順書です

これから先に示した「手順書の作成プロセス」に沿って、来所場面の支援手順（右表では「サービス手順」）を見直します

アセスメントや見直した手順が「正しい」かどうかではなく、作成のプロセスを理解し（根拠に基づいた）、プランを考えることがここでの目標です

時間	活動	サービス手順
9:30-10:00	**来所**	**【スケジュール１：朝の準備】 ・静養室でスケジュール確認 ・静養室で着替えて作業室へ**
10:00-10:45	班別活動	【スケジュール2：DVD組み立て】
10:45-11:00	お茶休憩	【スケジュール3：お茶休憩】
11:00-11:45	班別活動	【スケジュール4：DVD組み立て】
11:45-12:45	昼食昼休み	【スケジュール5：昼食】
12:45-13:30	散歩	【スケジュール6：散歩】
13:30-14:35	自立課題	【スケジュール7：自立課題】
14:35-15:00	帰り	【スケジュール8：帰宅】

モデル演習｜具体的に記載します

生じている問題、生じうるリスクを具体的に記載

□作業室へ案内するが、ウロウロと廊下を歩きまわる（作業室で、開始時間まで座って待てない）
□声かけするが、全く聞いていない様子。徐々に表情が強ばり、他害のリスクを感じる。

①背景の障害特性を推測｜氷山モデル

②障害特性を「強み」の表現に変換

③他の場面から「強み」のリスト追加

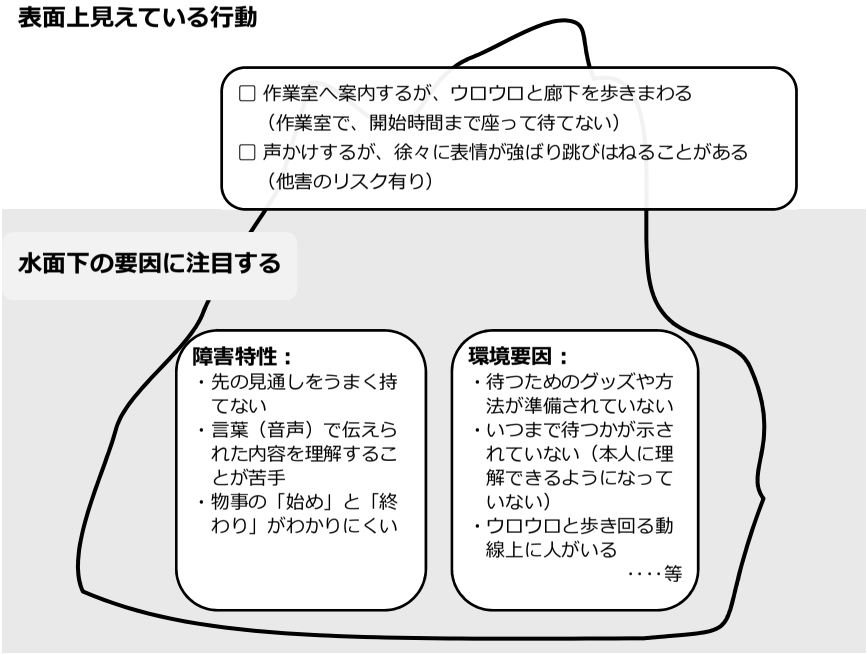
④「強み」を活かした新たな環境

手順書の作成プロセス①

①背景の障害特性を推測する｜氷山モデル

行動の背景にある障害特性（生物学的・心理的）を推測し、リストアップします。その際、行動の生起要因のきっかけとなっている環境（本人に影響を及ぼす物、事、人）要因にも留意しましょう。

氷山モデルとは、障害がある人の課題となっている行動を氷山の一角として捉え、氷山の一角に注目するのではなく、その水面下の要因に着目して支援の方法を考えることを意味します。



モデル演習｜具体的に記載します

生じている問題、生じうるリスクを具体的に記載

□作業室へ案内するが、ウロウロと廊下を歩きまわる（作業室で、開始時間まで座って待てない）
□声かけするが、徐々に表情が強ばり跳びはねることがある（他害のリスク有り）

①背景の障害特性を推測｜氷山モデル

- **先の見通しをうまく持てない**（待つためのグッズや方法が準備されていない）
- **言葉（音声）で伝えられた内容を理解することが苦手**（言葉で指示されている）
- **物事の「始め」と「終わり」がわかりにくい**（いつまで待つかが示されていない）

②障害特性を「強み」の表現に変換

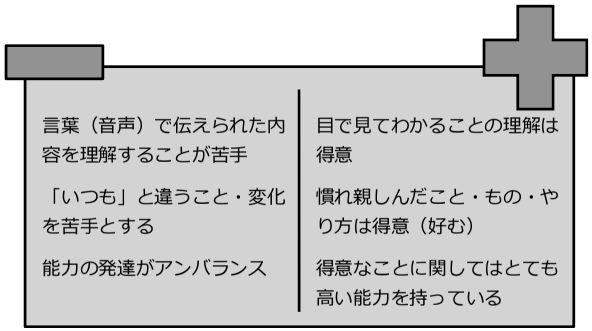
③他の場面から「強み」のリスト追加

④「強み」を活かした新たな環境

手順書の作成プロセス②

②障害特性を強みの表現に変換する

苦手なことばかりに注目すると、「苦手なこと（もの）を避ける」支援に偏ってしまいます。リストアップした障害特性を「強み」の表現に変換（リフレーミング）しましょう。 視点を変えることで、強みを活かした支援に繋げやすくなります。



言葉（音声）で伝えられた内容を理解することが苦手	目で見てわかることの理解は得意
「いつも」と違うこと・変化を苦手とする	慣れ親しんだこと・もの・やり方は得意（好む）
能力の発達がアンバランス	得意なことに関してはとても高い能力を持っている

ヒントシート：自閉症スペクトラム障害の特性（抜粋）を参考にして下さい

モデル演習｜具体的に記載します

生じている問題、生じうるリスクを具体的に記載

□作業室へ案内するが、ウロウロと廊下を歩きまわる（作業室で、開始時間まで座って待てない）
□声かけするが、徐々に表情が強ばり跳びはねることがある（他害のリスク有り）

①背景の障害特性を推測｜氷山モデル

- **先の見通しをうまく持てない**（待つためのグッズや方法が準備されていない）
- **言葉（音声）で伝えられた内容を理解することが苦手**（言葉で指示されている）
- **物事の「始め」と「終わり」がわかりにくい**（いつまで待つかが示されていない）

②障害特性を「強み」の表現に変換

- 見通しが持てることには安心して自立的に取り組むことができる
- 目で見て分かることの理解は得意
- 「始め」と「終わり」がわかるようになっていればしっかり守ることができる

③他の場面から「強み」のリスト追加

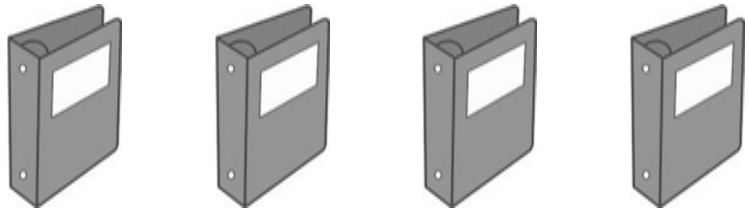
④「強み」を活かした新たな環境

手順書の作成プロセス③

③他の場面から「強み」のリストを追加

他の場面の観察から、リストされていない「強み」を加えていきます。

対象者の「強み」を様々な場面、記録から膨らませていきます。
特定の行動上の問題やリスクが推測される場面だけでなく、日常生活全般の様子から、強みのリストを補強していきます。



保護者からの情報　**生育歴**　**生活全般の記録**　**各種記録**

モデル演習｜具体的に記載します

生じている問題、生じうるリスクを具体的に記載

□作業室へ案内するが、ウロウロと廊下を歩きまわる（作業室で、開始時間まで座って待てない）
□声かけするが、徐々に表情が強ばり跳びはねることがある（他害のリスク有り）

①背景の障害特性を推測｜氷山モデル

- **先の見通しをうまく持てない**（待つためのグッズや方法が準備されていない）
- **言葉（音声）で伝えられた内容を理解することが苦手**（言葉で指示されている）
- **物事の「始め」と「終わり」がわかりにくい**（いつまで待つかが示されていない）

②障害特性を「強み」の表現に変換

- 見通しが持てることには安心して自立的に取り組むことができる
- 目で見て分かることの理解は得意
- 「始め」と「終わり」がわかるようになっていればしっかり守ることができる

③他の場面から「強み」のリスト追加

- 休憩時間、静養室のソファーで横になっていることが多い
- タイマーの意味は分かっている
- 刺激が少ない場所で、一人でいることを好むが、30分以上続くと興奮することがある

④「強み」を活かした新たな環境

手順書の作成プロセス④

④「強み」を活かした新たな環境

生じている問題・生じうるリスクのある場面で、「強み」のリストを活かした環境づくり（構造化）の計画を立てます。

構造化とは、その場の状況に最も適切な意味と見通しを明確に伝え、安心できてかつ自立的に行動ができるよう環境（もの、事、人）を調整することです。

物理的構造化	スケジュール	ワークシステム	決まった手順や習慣	視覚的構造化
・物理的、視覚的に分かりやすい境界を作る ・活動と場所の1対1の対応 ・妨害刺激の除去	どんな活動があるのか、その流れがどうなっているのかを視覚的に示す方法	自立的活動をする為の情報を伝える方法 ①何をするか ②どれぐらいするか ③どうなったら終わるのか ④終わったら次に何をするか	・いつも同じ手順で課題、活動を行う ・習慣化することで、普段の生活を安定したものにする ・ルーチンを使って繰り返している内に学習する	“見て分かる”ようにして理解しやすくする ①視覚的提示 ②視覚的明瞭化 ③視覚的組織化

モデル演習｜具体的に記載します

生じている問題、生じうるリスクを具体的に記載

□作業室へ案内するが、ウロウロと廊下を歩きまわる（作業室で、開始時間まで座って待てない）
□声かけするが、徐々に表情が強ばり跳びはねることがある（他害のリスク有り）

①背景の障害特性を推測｜氷山モデル

- **先の見通しをうまく持てない**（待つためのグッズや方法が準備されていない）
- **言葉（音声）で伝えられた内容を理解することが苦手**（言葉で指示されている）
- **物事の「始め」と「終わり」がわかりにくい**（いつまで待つかが示されていない）

②障害特性を「強み」の表現に変換

- 見通しが持てることには安心して自立的に取り組むことができる
- 目で見て分かることの理解は得意
- 「始め」と「終わり」がわかるようになっていればしっかり守ることができる

③他の場面から「強み」のリスト追加

- 休憩時間、静養室のソファーで横になっていることが多い
- タイマーの意味は分かっている
- 刺激が少ない場所で、一人でいることを好むが、30分以上続くと興奮することがある

④「強み」を活かした新たな環境

（静養室にて、スケジュール確認、更衣後）
- 静養室内にて、ソファーに座って休憩する
  →スケジュールに休憩を追加：**スケジュール**
  ＋ 人が気にならないよう衝立設置：**物理的構造化**
- 休憩の始まりと終わりはタイマーを使用
  →タイマー（20分）：**視覚的構造化**

演習①｜来所場面の手順を考える

【演習の手順】

〔全体〕事前準備 5分 → 〔グループ〕手順書の作成 15分 → 〔全体〕発表 15分

【事前準備】

- 「司会者」「記録者」「発表者」を決めましょう。これ以降は、演習ごとに役割を時計回りで交代します。
- のぞむさんの来所場面の状況（モデル演習の４つのプロセス）を再確認しましょう。

演習①｜支援手順を考える（15分）

グループでのぞむさんの朝の来所場面のサービス手順を考えましょう。巻末のワークシート（WS-1）を使ってください。

- ４つのプロセスで導かれたアイデアを活かしましょう。
- どのような点に悩んだのか、整理しておきましょう。

演習①｜発表（15分）

２～３グループに発表してもらいます。発表者はグループで話し合われた内容を全体に報告してください。

- ４つのプロセスで導かれたアイデアをどのように活かしましたか？
- どのような点に悩みましたか？

演習①｜来所場面の手順書（例）

①背景の障害特性を推測｜氷山モデル

⇩

②障害特性を「強み」の表現に変換 ⇨

③他の場面から「強み」のリスト追加 ⇨

④「強み」を活かした新たな環境

・静養室内にて、ソファーに座って休憩する
　→スケジュールに休憩を追加：
　＋　人が気にならないよう衝立設置
・休憩の始まりと終わりはタイマーを使用
　→ タイマー（20分）

⇩

時間	活動	サービス手順
9:30-10:00	来所	【スケジュール１：朝の準備】 １．静養室（スケジュール確認） →　２．静養室（作業着へ着替え） →　３．静養室（休憩） →　４．アラーム（9:50） →　５．作業室へ移動

まとめ｜手順書の作成プロセス

観察・予測｜日々の生活状況やアセスメントシート等から情報を収集

↓

生じている問題・生じうるリスクを具体的に記す

↓

① 背景の障害特性を推測｜氷山モデル

行動の背景にある障害特性（生物学的・心理的）と環境要因を推測し、リストアップする。

↓

② 障害特性を「強み」の表現に変換

リストアップした障害特性を「強み」の表現に変換する 。

↓

③ 他の場面から「強み」のリスト追加

他の場面の観察から、リストされていない「強み」を加える。

↓

④ 「強み」を活かした新たな環境

生じている問題・生じうるリスクのある場面で、「強み」のリストを活かした環境づくり（構造化）の計画を立てる。

演習②｜班別活動の手順を考える

【演習の手順】

〔全体〕演習の説明　10分 → 〔グループ〕演習②　45分 → 〔全体〕発表　15分 → 〔全体〕まとめ　20分

【事前準備】

- 「司会者」「記録者」「発表者」の役割を交代します。
- スライド「これまでの作業、これからの作業」、次頁のこれまでの手順書の内容を確認します。

これまでの作業、これからの作業

- 今年の４月から約半年間、のぞむさんはDVDの表面に貼ってあるシール（新作、準新作）を剥がす作業を行っていました。最初の４ヶ月は、シールを剥がすことや、剥がした後のシールやケースの置き場所が分かりませんでした。また剥がし終えたカバーは机右横の段ボール箱に入れてもらうようにしていたのですが、元の場所にカバーを戻してしまうことも度々ありました。
- 分かりやすいようにと１日分の作業を本人の机上に置いたり、タイマーを設置し鳴ったら終わり（45分間でセット）としていました。しかし、タイマーが鳴る前から中断したり、逆にタイマーが鳴っても終われないことがありました（声かけしても終われない）。そんな日は大きな声を出し、部屋から飛び出してしまうことがよくありました。
- 一番困ったのは、間違えていたときに教えてあげたり（ときには注意も）、終われなかったさいに声かけすると、大声を出したり、掴みかかってくることでした。でも同じ教えてあげるのでも、黙って手本を見せていたときは怒らず、じっと職員の手元を見ていました（･･･そういえば、それ以降作業の間違いがなくなったかも）。
- 少しずつ手順を覚え作業ができるようになってきたのぞむさんですが、半年を過ぎても作業が中断したり、又は終われないということが続いています。もう一度のぞむさんの特性を踏まえ、強みを活かした支援内容を考えてみたいと思います。

演習②｜班別活動の手順を考える

右の支援手順書は、のぞむさんの 「これまで」の支援手順書です

「手順書の作成プロセス」に沿って、班別活動の支援手順（右表では「サービス手順」）を見直します

アセスメントや見直した手順が「正しい」かどうかではなく、作成のプロセスを理解し（根拠に基づいた）、プランを考えることがここでの目標です

時間	活動	サービス手順
9:30-10:00	**来所**	**【スケジュール１：朝の準備】 ・静養室でスケジュール確認 ・静養室で着替えて作業室へ**
10:00-10:45	班別活動	【スケジュール2：DVD組み立て】
10:45-11:00	お茶休憩	【スケジュール3：お茶休憩】
11:00-11:45	班別活動	【スケジュール4：DVD組み立て】
11:45-12:45	昼食昼休み	【スケジュール5：昼食】
12:45-13:30	散歩	【スケジュール6：散歩】
13:30-14:35	自立課題	【スケジュール7：自立課題】
14:35-15:00	帰り	【スケジュール8：帰宅】

演習②｜支援計画を立てる（40分）

グループで話し合いながら、４つのプロセスを整理し、班別活動場面の支援の計画を立てましょう。巻末のワークシート（WS-2）を使ってください。

- ４つのプロセスで導かれたアイデアをどのように活かしましたか？
- どのような点に悩みましたか？

演習②｜発表（15分）

２～３グループに発表してもらいます。発表者はグループで話し合われた内容を全体に報告してください。

- ４つのプロセスで導かれたアイデアをどのように活かしましたか？
- どのような点に悩みましたか？

演習②｜４つのプロセス（例）

生じている問題、生じうるリスクを具体的に記載

□最初の4ヶ月間は、作業工程（方法や場所）を正確に理解できていない（現在も同様）
□声かけや注意をすると、大きな声を出したり、掴みかかってくることがある
□作業が終われないことがある

①背景の障害特性を推測｜氷山モデル

・先の見通しをうまく持てない
・言葉（音声）で伝えられた内容を理解することが苦手
・物事の「始め」と「終わり」がわかりにくい
・部分に意識が向き、全体を見ることが苦手

②障害特性を「強み」の表現に変換

・見通しが持てることには安心して自立的に取り組むことができる
・目で見て分かることの理解は得意
・「始め」と「終わり」がわかるようになっていればしっかり守ることができる
・全体を組織化することで、pointを向けることが出来る

③他の場面から「強み」のリスト追加

・手本、モデルを集中してみることが出来る
・一人で行う作業や自立課題は20分程度集中して取り組む
・写真を使った指示で活動がいくつか理解できる

④「強み」を活かした新たな環境

・集中持続確実な15分を作業の基本時間とする
→　スケジュールに休憩を追加：**スケジュール**
・修正を行う場合、モデル（望ましい方法）を見せる。
・終わりを「課題がなくなったら終わり＝量」にし、完成品を入れる箱も机上に置き、完成品の写真を箱に貼り入れるべき場所を明確にする：**視覚的構造化**

演習②｜支援の手順書（例）

①背景の障害特性を推測｜氷山モデル

⇩

②障害特性を「強み」の表現に変換

③他の場面から「強み」のリスト追加

④「強み」を活かした新たな環境

・集中持続確実な15分を作業の基本時間とする
　→　スケジュールに休憩を追加
・修正を行う場合、モデル（望ましい方法）を見せる。
・終わりを「課題がなくなったら終わり＝量」にし、完成品を入れる箱も机上に置き、完成品の写真を箱に貼り入れるべき場所を明確にする

⇩

時間	活動	サービス手順（案１）	サービス手順（案２）
10:00-10:45	班別活動	【スケジュール２：DVD組み立て×2回】 １．作業室（作業15分） →　２．静養室（休憩10分） →　３．アラーム →　４．静養室（スケジュール） →　５．作業室（作業15分）	【スケジュール２：DVD組み立て×2回】 １．作業室（作業15分） →　２．静養室（休憩10分） →　３．アラーム →　４．トイレ →　５．静養室（スケジュール） →　６．作業室（作業15分）

支援手順書｜作成のpoint

【各活動の時間】

一つ一つの活動の、持続可能な時間を把握しておくことは大切なpointになります。その中で、少し余裕を持って次の活動に移る活動を設定してみましょう。

【強みの考え方】

例えば「本をパラパラとめくって過ごすことが好き（５分間）」という情報があったとします。この情報をどのように受け取りますか？

仮に、こうした短時間の活動が６つあれば、合計３０分過ごすことが出来ます。また５～６分だけ過ごして欲しい場合などは、最も適した活動ともいえます。「強み」を積極的に意識してみましょう。

まとめ｜支援計画作成のプロセスが重要

□ **対応策だけでなく根拠を整理する**
- ■ 行動の背景や理由を確認する
- ■ 適切な引き継ぎだけでなく応用の可能性

□ **今後の暮らしを考える手がかり**
- ■ 支援者側からの問題が生じなければよいか？
- ■ 暮らしを支える（広げる）積極的な支援へ（予防）
- ■ 理解を助け自立を支援する（構造化）

※今できることを多くの場面で活用する

□ **事業所のサービスとしてチームで支援する**

まとめ｜手順書の作成プロセス

観察・予測｜日々の生活状況やアセスメントシート等から情報を収集

↓

生じている問題・生じうるリスクを具体的に記す

↓

① 背景の障害特性を推測｜氷山モデル

行動の背景にある障害特性（生物学的・心理的）と環境要因を推測し、リストアップする。

↓

② 障害特性を「強み」の表現に変換

リストアップした障害特性を「強み」の表現に変換する 。

↓

③ 他の場面から「強み」のリスト追加

他の場面の観察から、リストされていない「強み」を加える。

↓

④ 「強み」を活かした新たな環境

生じている問題・生じうるリスクのある場面で、「強み」のリストを活かした環境づくり（構造化）の計画を立てる。

参考文献

- 藤村出、服巻智子、諏訪利明、内山登紀夫、安倍陽子、鈴木信五「自閉症のひとたちへの援助システム」朝日新聞厚生文化事業団，1999
- 佐々木正美、内山登紀夫、村松陽子「自閉症の人たちを支援するということ」朝日新聞厚生文化事業団，2001
- ノースカロライナ大学医学部精神科TEACCH部／服巻繁「見える形でわかりやすく―TEACCHにおける視覚的構造化と自立課題」エンパワメント研究所，2004
- 佐々木正美／宮原一郎「自閉症児のための絵で見る構造化」学習研究社（学研），2004
- 佐々木正美「自閉症のすべてがわかる本」講談社，2006
- 水野敦之「「気づき」と「できる」から始めるフレームワークを活用した自閉症支援」エンパワメント研究所，2011

2日目
10:10

【演習】

記録に基づく支援の評価

－危機対応と虐待防止との関連から－

西村 浩二
（社福）つつじ　広島県発達障害者支援センター

この時間の目的

本人に合った生活環境を模索している過程で、職員や他の利用者を叩くなどのトラブルが発生してしまうことは少なくありません。この時間はそうした事態を想定して、記録を取り、それに基づいて支援の方法を再検討するプロセスを学びます。

【ポイント】

① アセスメントや再検討した支援計画が「正しい」かどうかを問題にする時間ではありません。

② 「どのようなプロセスで記録の方法を考えればいいのか」というプロセスを理解しましょう。

③ 危機対応の方法と考え方について、虐待防止の観点から整理しましょう。

演習の流れ

10:10　10:30　11:00　12:00

〔各自〕記録の原則と方法 20分 → 〔グループ〕演習① 30分 → 〔グループ〕演習② 60分 → 〔全体〕危機介入と虐待防止 10分

演習①：何を記録するのかを個人・グループで検討し、決めるまでのプロセスとポイントを学びます。

演習②：記録する内容を絞り込み、具体的な記録フォームの作成・記録方法の検討を行います。

突然訪れる危機的な状況

- 支援会議で話し合った内容をもとに、来所時や班別活動時の手順を見直すことで、のぞむさんの生活は少し落ち着いたかに見えました。
- しかし、２週間ほど経ったある日の、午後の自立課題の時間に事件は起きました。休憩時間から自立課題にうまく切り替えることができず、のぞむさんは廊下を唸り声を出しながら行ったり来たりしていました。そして、そこにたまたま通りかかった他の利用者に、大声を上げて突然掴みかかりに行ったのです。
- 危険を感じた職員が間に割って入りましたが、のぞむさんに強く突き飛ばされてしまい、さらに騒ぎは大きくなってしまいました。別の部屋にいた職員が駆けつけ、２人がかりで抑えて静養室に移動させたことで何とかその場は収まりましたが、移動の間に興奮するのぞむさんともみ合ったため、抑えた職員ものぞむさんも何ヶ所か打ち身と裂傷を負ってしまいました。
- のぞむさんは静養室でもなかなか落ち着かず、部屋にあったものを強く投げつけたり引っ張ったため、部屋のいすや、設置してあったスケジュール表などが完全に壊れてしまいました。

記録と評価｜なぜ記録が必要なのか

変化を把握する

■ 強度行動障害のある人の状態はさまざまな環境の影響を受けて変化する。

■ 場面による行動の違い、週・月・年単位での行動の変化がある。

⇒客観的な記録があることによって、職場内や他職種との共通理解が図りやすくなる。

原因を考える

■ 必ずしも支援の計画を立てる段階で、背景にある原因を考えるのに十分な情報があるとは限らない。

⇒支援計画を立てて実施した後も、情報を収集して、それを元に支援を再検討する必要がある。

記録と評価｜変化を把握する

変化を把握するための記録

1．問題となっている行動に着目する

例）頻度、強度、持続時間

2．記録する時間帯や場面等を決める

例）１日を通して、時間の区切りごとに、場面ごとに

3．継続できるように工夫する

例）既にあるものを活用する、置く場所、期限を設ける

期間を決めて変化をまとめる

■ ひとめでわかるように整理する

例）折れ線グラフ、一覧表

記録と評価｜原因を考える

関連しそうな情報を集める

■ 障害特性やスキルをもう一度調べる

例）苦手なこと、得意なこと、できること、できないこと

■ 生活全体の状況を確認する

例）家庭・家庭の状況、生活のパターン

■ 生理・医学的な情報を収集する

例）睡眠、病気、服薬、周期的な変化

できているとき・できていないときの環境を詳しく見る

■ 問題が生じた前後の状況を整理する

例）機能的アセスメント（機能分析、ABC分析）

例

＿＿＿＿＿＿＿さんの行動記録

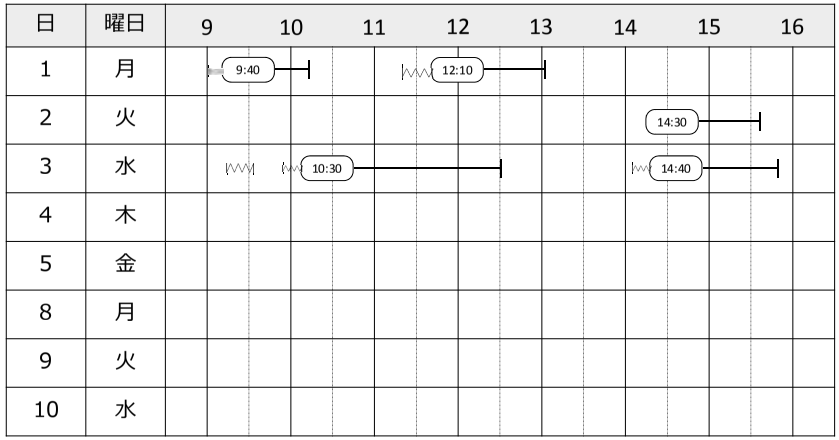
■ 他の利用者に掴みかかる・・・●
■ 危険を感じた・未然に防いだ・・・○
■ その他の攻撃等・・・×

活動	10/13（月）	10/14（火）	10/15（水）	10/16（木）
来所・準備	●	○	×	
班別活動①				
お茶休憩	●●×		○○	
班別活動②		××		
昼食・昼休み	○		●○	●○
散歩				
自立課題		●		
帰り	○×			●○

例

＿＿＿＿＿＿さんの行動記録

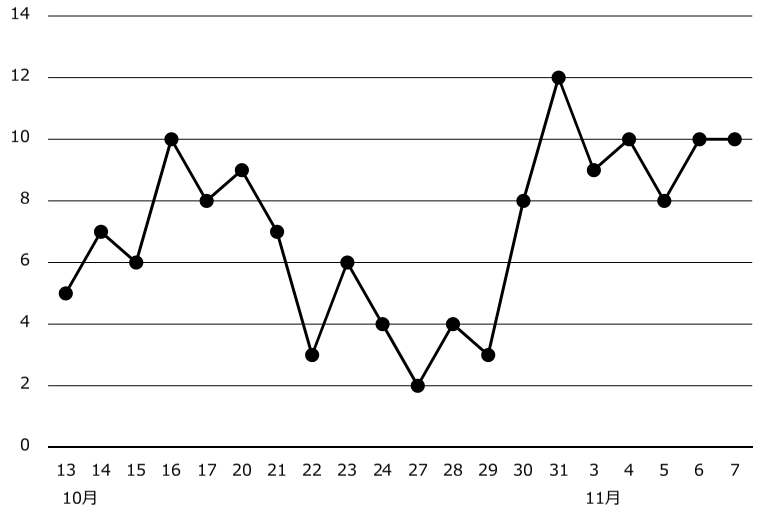
■ チェックする行動・・・他の利用者に掴みかかる
・起きた時刻：〇:〇〇
・落ち着くまでにかかった時間：
・前兆（低い唸り声、体を前後に揺する等）：



例

＿＿＿＿＿＿さんの行動記録

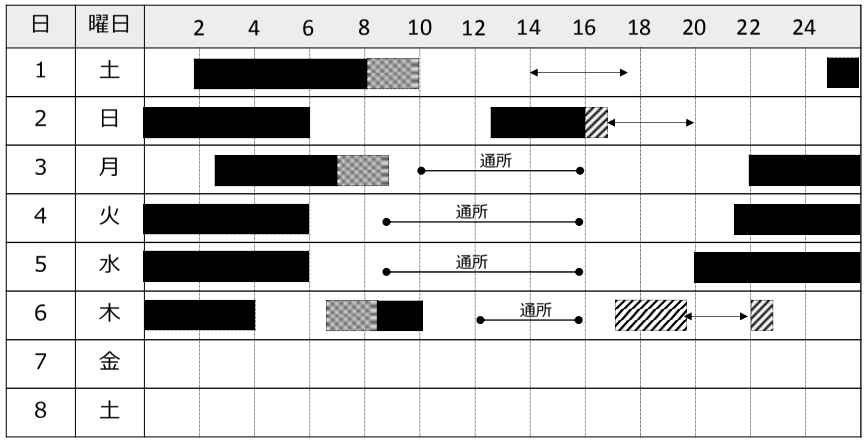
■ 他の利用者を突き飛ばした回数



例

＿＿＿＿＿＿さんの生活記録

ぐっすり寝た
うとうとしていた
寝てはいないが横になっていた



例

＿月＿日の＿高崎のぞむ＿さんの行動記録

起きた場面・状況	起きた行動	行動の後に起きたこと
• 9:50頃、活動に向かう途中 • 〇〇さんが大声を出しながら廊下を行ったり来たりしていた • 気にする高崎さんに職員（××）が制止して作業室に促した	• 〇〇さんを気にして近づこうとした • 職員にされると興奮が高まり壁を蹴った	• 職員（××）の誘導で作業室に移動し、作業に取り組むことができた • 作業をしているうちに興奮は治まった
• 13:00過ぎ、散歩前のトイレ • 入れ違いに〇〇さんがトイレから出てきた	• 突然、〇〇さんに頭突きをした	• 職員（△△と××）が制止 • 静養室に誘導され、落ち着くまで一人で過ごした（約30分）

※関連しそうなその他の情報
・前日の夜は寝付きが悪く、睡眠時間が４時間程度。
・最近、睡眠が乱れているとの母からの情報あり。

演習①｜必要な情報を考える

- 「司会」「記録」「発表者」を決めてください。
- エピソード「突然訪れる危機的な状況」を読み、今後の支援を考えるために、どのような情報を集めればよいか考えましょう。

【演習の流れ】

演習①｜突然訪れる危機的な状況

- 支援会議で話し合った内容をもとに、来所時や班別活動時の手順を見直すことで、のぞむさんの生活は少し落ち着いたかに見えました。
- しかし、２週間ほど経ったある日の、午後の自立課題の時間に事件は起きました。休憩時間から自立課題にうまく切り替えることができず、のぞむさんは廊下を唸り声を出しながら行ったり来たりしていました。そして、そこにたまたま通りかかった他の利用者に、大声を上げて突然掴みかかりに行ったのです。
- 危険を感じた職員が間に割って入りましたが、のぞむさんに強く突き飛ばされてしまい、さらに騒ぎは大きくなってしまいました。別の部屋にいた職員が駆けつけ、２人がかりで抑えて静養室に移動させたことで何とかその場は収まりましたが、移動の間に興奮するのぞむさんともみ合ったため、抑えた職員ものぞむさんも何ヶ所か打ち身と裂傷を負ってしまいました。
- のぞむさんは静養室でもなかなか落ち着かず、部屋にあったものを強く投げつけたり引っ張ったため、部屋のいすや、設置してあったスケジュール表などが完全に壊れてしまいました。

演習①｜必要な情報を考える

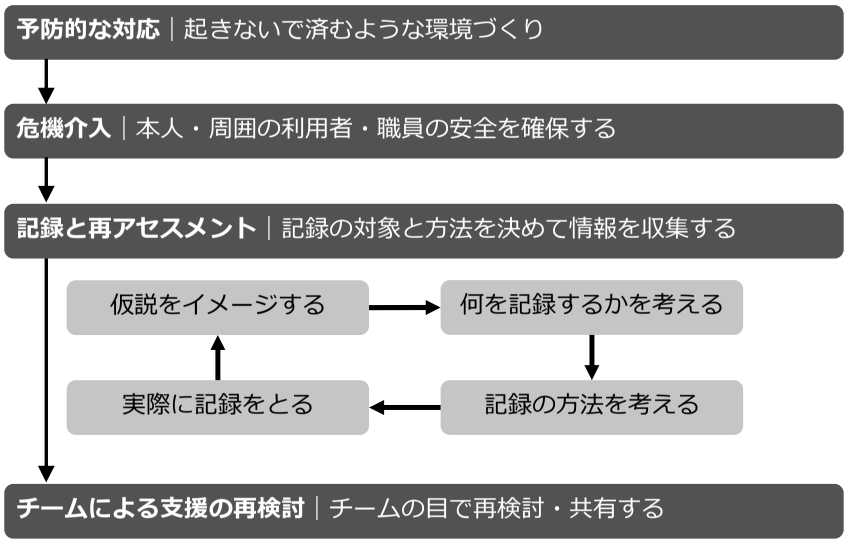
【各自】

1. こうした状況がこれからも生じると想定したときに、今後の支援を考えるうえで、どのような情報を「欲しい」「集めたい」と思いますか。できるだけたくさんワークシート（WS-3）に書いてみましょう。

【グループ】

2. 各自で考えた「欲しい」「集めたい」情報を共有しましょう。

演習①｜まとめ



演習①｜必要な情報を考える（例）

こうした状況が今後も生じると想定したときに、今後の支援を考えるうえで、どのような情報が「欲しい」「集めたい」と思いますか。

（例）

・こうした行動が１週間にどれくらいあるのか
・どのような状況で起きたのか
・職員がどのように対応したのか
・何か前兆のような行動はあるのか
・落ち着くまでにどれくらい時間がかかるのか
・生活の状況に変化はあるのか

・・・etc.

演習②｜記録の方法を考える

- この時間は、具体的にどのような情報について、どのような方法で記録するのかをグループで考える時間です。
- 再度、「突然訪れる危機的な状況」を確認しましょう。
- グループワーク後には発表の時間があります。２～３グループに発表をお願いします。

【演習の流れ】

演習②｜記録の方法を考える

1. 危機的な状況が生じた原因として、次の３つの仮説が浮かび上がってきました。グループで話し合って、どの角度から記録方法を考えるのか、１つを選んでください。

<u>仮説１</u>：睡眠や排便、服薬などの生理的・病理的な背景が関係しているのではないか。

<u>仮説２</u>：前兆となる行動やきっかけ、起きた後の対応など、そのときの状況から探れないか。

<u>仮説３</u>：場面や時間帯、曜日など、何かパターンや周期があるのではないか。

演習②｜記録の方法を考える

2. 選んだ仮説に基づいて、「どのような行動（あるいは情報）について」、「どのような記録を取るのか」を具体的に考え、記録フォームにイメージをワークシート（WS-4）に作ってみましょう。

※ 必要があれば「情報シート」を参照してください。
※「○○という行動がある」と想定して、記録方法を考えていただいても結構です。

3. その記録は実際に取ることができそうですか？どれくらいの期間つけるのか、誰が記録するのか、継続して記録できる工夫を考えてみましょう。

演習②｜記録の方法を考える

4. 話し合った内容を発表しましょう。
   ※２～３グループに発表していただきます。
   ※ 作成した記録フォームはスクリーンに写します。

演習②｜記録方法を考えるプロセス

予防的な対応｜起きないで済むような環境づくり

↓

危機介入｜本人・周囲の利用者・職員の安全を確保する

↓

記録と再アセスメント｜記録の対象と方法を決めて情報を収集する

- 仮説をイメージする → 何を記録するかを考える
- ↓
- 記録の方法を考える → 実際に記録をとる
- ↑

↓

チームによる支援の再検討｜チームの目で再検討・共有する

演習②｜記録の方法を考える〔例〕

記録の例１

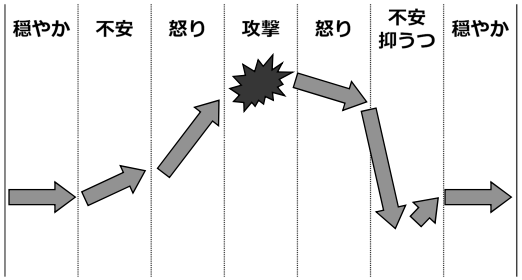
- のぞむさんの様子を見ていると、激しい行動が出る前には「低い唸り声をあげる」という前兆がありました。そこで、前兆が見られたときには必ず１人がそばで様子を見ることにして、「前兆が見られた時間」と「どれくらい続いたのか」を記録することにしました。
- やがて、前兆が現れるパターンや、そこから興奮が高まるパターンが見えてきたことで、環境調整による予防的な対応が可能になりました。

記録の例２

- 問題が起こった日を振り返っていたところ、朝から体調が悪そうだったとの意見が出ました。そこで、ご家庭にも協力してもらい、睡眠と排便の記録を取ってみることにしました。また、各活動場面で攻撃などが見られたときには、職員室にある記録用紙に各自で回数を記入することにしました。
- しばらくすると、はっきりとではありませんが排便のリズムとの関係が見えてきて、問題が起きやすい日を予測できるようになりました。

危機介入｜原則とその方法

- 安全確保が最優先であり、指導・支援の機会ではない
- エスカレートする前・表面化したときの対応を予め考え、スタッフ間で共有しておく
  例）包括的暴力防止プログラム（CVPPP）
  例）非暴力的危機介入法®



包括的暴力防止プログラム認定委員会（2005）を参考に作成

危機介入｜身体拘束の考え方

身体拘束実施の３要件

切迫性	非代替性	一時性
利用者本人又は他の利用者等の生命、身体、権利が危険にさらされる可能性が著しく高いこと	身体拘束その他の行動制限を行う以外に代替する方法がないこと	身体拘束その他の行動制限が一時的なものであること

やむを得ない身体拘束（危機介入）のその後

- “危機”であれば繰り返して良いのか
- 緊急であっても身体拘束 ≠ 適切な支援
- 連続性の錯覚〔野沢, 2006; 野沢, 2007; 基礎研修テキストp.98〕

参考文献

危機介入

- 包括的暴力防止プログラム認定委員会「医療職のための包括的暴力防止プログラム」医学書院，2005

障害者虐待の防止

- 野沢和宏「知的障害と社会①なぜ人は虐待するのか～障害のある人の尊厳を守るために～」有限会社Sプランニング，2006
- 野沢和宏「条例のある街－障害のある人もない人も暮らしやすい時代に－」ぶどう社，2007

機能的アセスメント

- 井上雅彦・小笠原恵・平澤紀子「8つの視点でうまくいく!発達障害のある子のABAケーススタディ―アセスメントからアプローチへつなぐコツ」中央法規出版，2013

2日目
13:30

【演習】

障害特性の理解とプランニングⅡ

－行動援護を利用した外出時の支援の手順書を作成する－

林　克也
国立障害者リハビリテーションセンター学院

この時間の目的

屋内での日中活動の支援とは異なり、外出時の支援には特有の配慮が必要となります。この時間は、「高崎のぞむさん」が行動援護を利用して外出する場面を想定し、自閉症や知的障害の障害特性に配慮した外出時の「支援の手順書」を作るプロセスを学びます。

【ポイント】

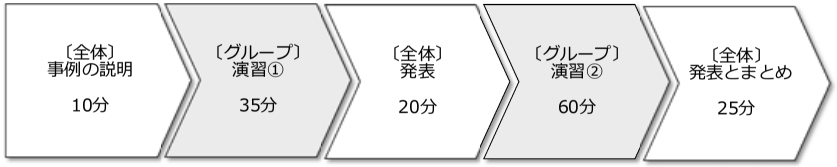
① アセスメントや検討した支援計画が「正しい」かどうかを問題にする時間ではありません。

② 外出時の支援で特に気をつけなければいけないポイントを押さえましょう。

③ 経験の比較的浅いヘルパーに指示を出す際の留意点を整理しましょう。

この時間の流れ

13:30	13:40	14:15	14:35	15:35



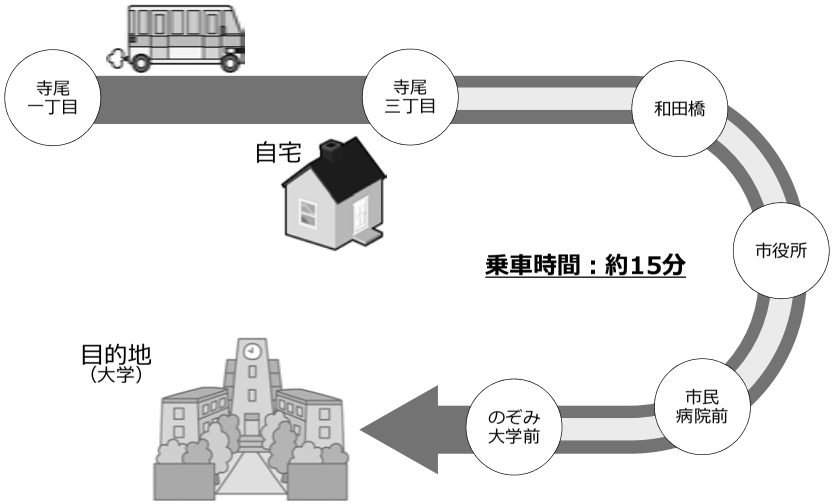
演習１：行動援護を利用した外出時を想定して、障害特性の把握と支援の計画を立てましょう。

演習２：立案した支援の計画を経験の浅い職員に伝えるための「支援の手順書」を作成し、実際に伝えましょう。

のぞむさんの休日

- ある天気のいい土曜日の午後のことです。のぞむさんは行動援護事業所のヘルパーと一緒に路線バスに乗って15分くらいのところにある大学構内に散歩に出かけました。
- あまり人のいない静かな構内の散歩道を歩き、学生食堂前にある自動販売機でジュースと小さなお菓子を買う。乗り物好きで食べることも大好きなのぞむさんの、休日のささやかな楽しみです。
- 長年続いていた週末のドライブがお父さんのケガで続けられなくなったのをきっかけに、継続可能な週末の過ごし方を考えようと、この散歩を取り入れてから早２ヶ月が経ちました。
- 毎回、出発時に外出の流れを写真カードを使いながら丁寧に説明していることもあり、のぞむさんもだいぶ慣れたようです。今ではヘルパーが訪問すると、嬉しそうにリュックサックを背負って家から出てくるようになりました。

のぞむさんの外出｜バスのルート



のぞむさんの外出｜大学の構内

左上：バス停

右上：食堂前の広場

左下：自動販売機

あるヘルパーの悩み

- のぞむさんの外出を担当しているヘルパーにはとても困っていることがあります。それは、のぞむさんが降りる停留所ではないのに降車ボタンを押してしまうことです。
- ボタンを押してしまうと降りずにはいられません。仕方なく手前のバス停で降りることになり、混乱するのぞむさんを目の前にして途方にくれたこともあります。
- 今のところ、その場しのぎでボタンを隠したり遮ったりもしていますが、のぞむさんがイライラするだけであまり効果はありません。ただ座って着くのを待つのが苦手なようで、着くのを今か今かと待っている様子も見られます。
- のぞむさんは子どもの声も苦手です。バスの中でうまく過ごせずイライラしているときに、もしバスに小さな子どもが乗ってきたら…。悩む日々が続いています。

演習①｜バス内の過ごし方を考える

- テキストに沿って、のぞむさんのバスの中での過ごし方について支援計画を考えましょう。
- 「司会」「発表者」「記録」を決めてください。

【演習の流れ】

〔全体〕演習の説明 5分 → 〔グループ〕支援計画作成 30分 → 〔全体〕発表とまとめ 20分

【使用する情報】

1. のぞむさんの基本情報（情報シート　P１-P8）
2. のぞむさんの外出について（情報シート　P9）
3. スライド「あるヘルパーの悩み」

演習①｜支援計画の作成（30分）

①～④のステップに沿って、グループで話し合いながら支援の計画を立てましょう。適宜、ワークシート（WS-5）を使ってください。

生じている問題、生じうるリスクを具体的に記載

- 目的地より手前のバス停で降車ボタンを押し、実際にそのバス停で降りてしまう。
- 小さな子どもが乗ってきたときに、声に反応して押す･声をあげる等の行動が出るおそれがある。

①背景の障害特性を推測｜氷山モデル

②障害特性を「強み」の表現に変換

③他の場面から「強み」のリスト追加

④「強み」を活かした新たな環境

演習①｜発表とまとめ（20分）

1．２～３グループに発表してもらいます。

2. 発表者は、４つのプロセスに沿って、どのような結論になったのかを簡潔にご報告ください。

演習①｜記入例

生じている問題、生じうるリスクを具体的に記載

- 目的地より手前のバス停で降車ボタンを押し、実際にそのバス停で降りてしまう。
- 小さな子どもが乗ってきたときに、声に反応して押す･声をあげる等の行動が出るおそれがある。

①背景の障害特性を推測｜氷山モデル

- 言葉の理解が難しい（降りるバス停とそうでないバス停の区別が視覚的に示されていない、「押してはダメ」等と否定的な指示が言葉で伝えられている）。
- 何もしないで待つことが難しい（車内で待つための方法が用意されていない）。
- 子どもの声が苦手（子どもが乗ってくることが予期できず、静かにしてもらうこともできない）

②障害特性を「強み」の表現に変換

- 降りるバス停までの見通しが視覚的に示されていれば理解できる。
- 視覚的に伝えられれば理解しやすい。
- 肯定的で短い言葉（「次ですよ」等）で伝えられれば抵抗なく受け入れられる。
- 好きなことをしていれば30分以上は待てる。

③他の場面から「強み」のリスト追加

- 家では、ヘッドフォンを使って音楽を聞いて過ごしており、お気に入りの曲であれば30分程度は聞いていられる。
- スケジュールでの予定の把握が可能
- 短い、単語での指示であれば理解しやすい

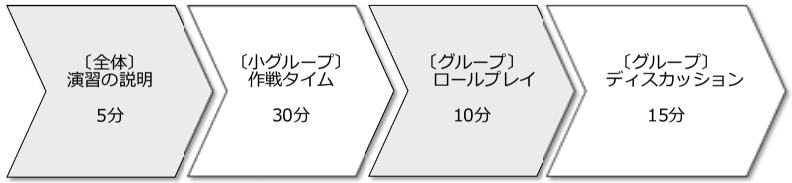
④「強み」を活かした新たな環境

- バス停を通過する毎に「バス停の写真」を剥がしていくスケジュールを作り、視覚的に見通しを持たせる。
- 車中は好きな音楽をイヤホンで聞く。
- 降りるときには、スケジュールの降車ボタンカードを示して、「次ですよ」と声をかける。

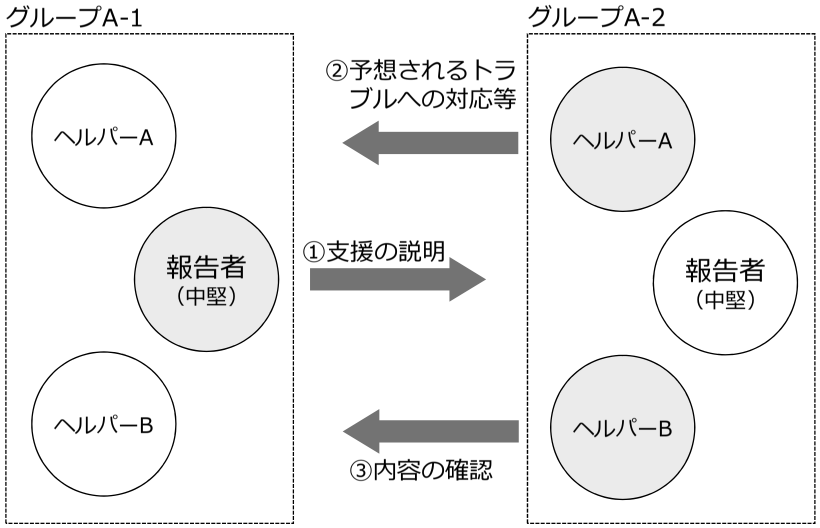
演習②｜支援の計画を伝える

- テキストに沿って、考えた支援計画を「支援の手順書」にまとめ、他のヘルパーに伝えましょう。
- ３人の小グループに分かれて、役割を決め、互いに伝達し合います。

【演習の流れ】



演習②｜支援の計画を伝える



演習②｜作戦タイム（30分）

1. 小グループの中で「報告者」「ヘルパーA」「ヘルパーB」を決めてください。

2. 演習①で考えた支援の計画をもとに、「支援の手順書」を作成しましょう。適宜、ワークシート（WS-6）を使ってください。

3. 「支援の手順書」を使って３分間で相手グループのヘルパーに説明する準備をします。少なくとも「根拠を示して」「わかりやすく」の２点には留意しましょう。

演習②｜ロールプレイ（10分）

1. どちらの小グループから報告するのかを決めてください。

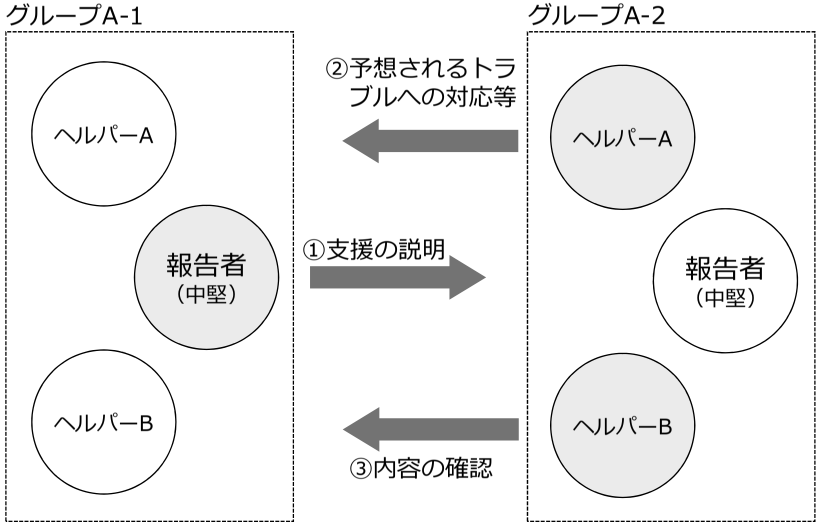
2. 報告者は、作戦どおりに相手グループのヘルパーに説明をしましょう。時間は３分間です。

3. 報告を受けた小グループのヘルパーは、報告者に対して質問や確認をしましょう。報告者は質問に対して簡潔に答えましょう。

   ヘルパーA：具体的な状況をあげて、トラブルが起きたときの対応について質問しましょう。
   例）急に腹痛になったときにはどうしたらいいですか
   ヘルパーB：支援の手続きについて整理して、「〇〇ということですね」と確認をしましょう。

4. 小グループを交代して、同じように１～３を行ってください。

演習②｜支援の計画を伝える



演習②｜ディスカッション（15分）

1. ヘルパー役の人は、相手の説明が「わかりやすかったか」「根拠が示されていたか」という観点から、感想を述べてください。報告者役の人は、報告するうえで「難しかった点」をあげてください。

2. その他、気がついた点があれば共有したうえで、支援の手順をうまく伝えるために重要だと感じたポイントを整理しましょう。

演習②｜発表とまとめ（25分）

1. ２～３グループに発表してもらいます。

2. 発表者は各グループで話し合われた内容を全体に報告してください。

演習②｜手順書の作成・説明の例

例えば次のような内容、流れが考えられます。

手順書

- 報告者（サービス提供責任者等）が作成したプランに沿って何回か試し、わかっていること・そうでないことを明確に。
- 乗車から降車までのステップと、各ステップでの注意点を簡潔に記載する。

説明

- １回目は報告者が引き継ぎのヘルパーと一緒に同行して、支援の手順を実際に示す。
- 手続きを決めた理由と、その通りにやる重要性、緊急時対応、留意点、記録等について補足の説明をする。

まとめ｜（外出時の）支援のポイント

【外出で失敗しないために】

- 障害特性や本人の行動特性に配慮した事前準備を念入りに
- 常に先手の支援で行動障害の予防
- 本人の疲労度に配慮　→　疲労に起因する行動障害
- 次回の外出に対するモチベーションに配慮
- 日常生活に戻るまで支援は終わらない

etc.

まとめ｜伝えるときのポイント

【手順書と説明のチェックポイント】

- □ 手順はシンプルか（対応が細か過ぎたり、複雑な手順が必要だったりしないか）
- □ 課題となる行動への対応方法が具体的に伝えられているか
- □ なぜそのような方法になったのかという意味（理由）が伝わっているか
- □ 本人の行動と支援の流れが整理されているか
- □ 記録の内容と方法が決められているか
- □ ２人で付くときの役割分担が決められているか

etc.

まとめ｜手順書の作成プロセス

観察・予測｜日々の生活状況やアセスメントシート等から情報を収集

↓

生じている問題・生じうるリスクを具体的に記す

↓

① 背景の障害特性を推測｜氷山モデル

行動の背景にある障害特性（生物学的・心理的）と環境要因を推測し、リストアップする。

↓

② 障害特性を「強み」の表現に変換

リストアップした障害特性を「強み」の表現に変換する 。

↓

③ 他の場面から「強み」のリスト追加

他の場面の観察から、リストされていない「強み」を加える。

↓

④ 「強み」を活かした新たな環境

生じている問題・生じうるリスクのある場面で、「強み」のリストを活かした環境づくり（構造化）の計画を立てる。